カナダ便り

氷原の狩猟民 イヌイットの現在

岸上伸啓

イヌイットとは、一般にエスキモーと呼ばれてきた人々のことである。「エスキモー」という言葉は、クリー・インディアン語の「生肉を食べる人」という単語に由来すると言われている。エスキモーと呼ばれてきた人々は、自分たちのことをイヌイット（彼らの言葉で「人間」という意味）と呼んできたため、現在のカナダでは〝イヌイット〟を公称として用いている。

イヌイットの起源は、アジアにあるとされ、ベーリング海峡ないしアリューシャン列島を通って、北米大陸に移り住み、極北地帯に適応したと言われている。彼らは、北緯55度以北の木の生えない寒冷なツンドラ地帯で生活を営むことに成功しており、人類学的にみて、最も地球にうまく適応した民族のひとつと考えられている。言語学的には、彼らの言葉は、エスキモー・アリュート語族に属し、大別すればイヌピックとユピックという二大方言に分けることができる。現在、彼らは、ソ連、アメリカ（アラスカ）、カナダおよびデンマーク（グリーンランド）四国にまたがる広大な地域に住んでおり、その推定人口総数は、約十万人弱である。

私たち日本人がイヌイットに対してもつイメージは、雪の家に住むとか氷原を犬ゾリに乗って旅をするといった、ロマンチックなものが多い。その一方で、最近のジャーナリズムは、アルコール中毒など社会問題を主に取り扱っている。ここでは、私が実際に見た、北ケベックに住むイヌイットの現在の生活ぶりを素描してみたい。

私は昨夏、予備調査のため、アクリヴィックというハドソン湾の北東部沿岸（ケベック州）にある人口約三百人のイヌイットの村を訪問した。この村の生業の中心は、今でも狩猟および漁労である。冬場はアザラシやカリブー狩り、春秋は野鳥猟、夏場は北極イワナ漁が、生業の中心となる。現在では、高性能ライフル、エンジン付きボートやスキドウー（雪上車）などを用いた近代的狩猟、漁労が行なわれている。この村の人々の食料源の大半は、この狩猟、漁労から得たものである。

一部の若者のように、生協、町役場や学校で、いわゆるホワイト・カラーの仕事を専業とする人々もいるが、休日には彼らも狩猟、漁労に従事している。また一般に、この村の男性成人は、ほとんど例外なく、現金収入のためにパートタイムのソープ・ストーン彫刻に従事している。

現在のイヌイットは、冬場の狩猟の旅の時以外には、イグルーという雪の家に住むことはない。住居は、政府の援助によって、近代的な西洋家屋へと転換が図られてきた。この村の全員が家屋の規模の差はあれ、西洋風家屋に住んでいる。例えば、私が下宿した家などは、デュプレックスといって、ベッドルームが四つ、リビングルーム、キッチン、バス、トイレおよびセントラル・ヒーティングの設備を持つ、信じられないほど近代的な家であった。州政府住宅公団に支払われる家賃は、一か月あたり約二百十ドル（約三万八千円）だというから、住宅難に悩んでいる日本の都市居住者から見たら羨ましい限りである。

現在のイヌイットの服装は、冬場を除けば、日本やカナダ南部のそれとほとんど変わるところがない。若者はジーンズを好んで着ている。顔かたちも日本人とよく似ており、私も何度かイヌイットにまちがえられた。

食べ物の嗜好はあまり変化しておらず、アザラシ、カリブー、極北イワナ、野鳥などが好まれている。野鳥を除けば、ほとんどのものが生のまま食されている。キッチンで、かわいいギャルたちが一匹のアザラシをとりかこみ、口のまわりを血でまっかに染めながらおいしそうに食事をしている様は、やはり一種のすごみがある。私が滞在した八月は、極北イワナの網漁の時期にあたり、毎日、新鮮な魚をいやというほど食べることができた。次に行く時には、醤油とワサビをもっていこうと思った。この村には生協もあり、そこではコカコーラやポテト・チップから即席フライド・チキンまで買うことができる。

村の人々の娯楽は、村内の友人や親戚を毎晩、訪ね歩くことである。彼らは、どの家でも、いつでもかってに入っていくことができ、そこにあるものは何を食べてもだれにもとがめられることはない。イヌイット社会では、プライバシーを守ることは極めて難しいが、逆に孤独に悩まされることもない。

カナダにあるイヌイット・コミュニティーの社会変化は多様であり、この村をもって、カナダのイヌイット社会の典型とすることはできない。しかしこの村のように、自らの手でアルコール中毒の問題を解決し、自らの将来をより良くしようと努力しているところもある。彼らには、まだ多くの解決しなければならない経済・政治問題が残されているが、彼らが努力をしている現在、彼らの将来はジャーナリズムが騒ぐような暗いものではない、という印象を受けた。

（マッギル大学大学院在学中）